

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 元 年 6 月 19 日現在

機関番号：84604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K18224

研究課題名（和文）北陸地方の温泉地における共同浴場の建築史的研究

研究課題名（英文）The Architectural history study of Public Bath in the spa at Hokuriku district

研究代表者

福島 啓人（FUKUSHIMA, HIROHITO）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号：80769703

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000 円

研究成果の概要（和文）：北陸地方の7カ所の温泉地（山代、山中、片山津、粟津、和倉、湯涌、旧立山）の共同浴場について、近世から戦後に至るまで、その建築的変遷について整理した。平面規模や構造形式の変遷、建築意匠の変遷を整理し、特にコンクリート造の導入など近代化の時期をあきらかにした。加えて、共同浴場の修理更新周期とその要因を検証した。さらに、山代温泉や山中温泉、粟津温泉、旧立山温泉では新出の図面資料から具体的な建築規模や設計者、施工者、建設費などをあきらかにした。また山代温泉では、近代以降の権利関係と共同浴場の改築に着目し、温泉地の空間的な変容過程をあきらかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

公共施設として地元民の日常生活の一部として利用されてきた温泉地の共同浴場について、北陸地方の7カ所の温泉地を対象として、近世から近代以降の建築的変遷や修理更新周期の変化、近代以降の法制度の整備にともなう権利関係の変容、近代以降の建築材料の変化にともなう建築構造の変化などを中心に、建築としての共同浴場、温泉地における共同浴場のふるまいについて、その一端を明らかにした。公共施設としての共同浴場は、建物の更新周期も早く、建築資料の残存も多くないが、本研究ではこれまで研究がなされていない共同浴場建築の基礎的研究としてだけでなく、広く建築史、都市史の一端明らかにした点で社会的・学術的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Sort architectural changes about Public Bath buildings in the spa at Hokuriku district, Yamashiro, Yamanaka, Katayamaz, Awazu, Wakura, Yuwaku, and Old Tateyama hot-springs, from Edo period to after WW2. By sort the changes of plan size, structural type, and style, this study revealed the time of modernization of Public Bath, especially introduction of the concrete structure. And this study verified the cycle of repairs and rebuilding, and the factors. At some Public Baths, identified about planning, architect, builder, and building cost by new primary sources. In addition, revealed the transformation process at Yamashiro spa by focusing the relations between the rights of hot-springs and rebuilding of Public Bath in modern age.

研究分野：近世近代建築史・都市史

キーワード：共同浴場 北陸 山代温泉 山中温泉 和倉温泉 温泉 共同湯

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19（共通）

1．研究開始当初の背景

（1）問題の設定

我が国の多くの温泉地は、元来湯治場として成立し、近代以降に観光地へと変化したところも多いことは自明であろう。共同浴場を設けていた温泉地も多く、江戸時代より浴客や地元住民が共同浴場を利用していた。温泉地の共同浴場は地元民の日常生活の一部として利用され続け、近代以降も公共的かつ温泉地の中核を恒常的に担う存在であり、文化や町並を創出してきた重要な施設である。そのため共同浴場が寄付金によって建設されることもあれば、著名な建築家によって設計されることで、広告塔としての機能も果たしていた。

しかしながら、近代以降に温泉地が観光地化するなかで、特に高度経済成長期には、大型ホテルの建設や温泉地の拡大など、近世的な湯治場の空間の大部分は消滅しつつあるといえる。加えて、バブル崩壊後はホテルの廃業や共同浴場の閉鎖が深刻化し、往時の賑わいを感じさせない温泉地も多い。

そうした背景のもと、近年、地元自治体や温泉旅館組合、NPO などが共同して、温泉地の歴史的町並の整備や建物の復元を手法として、温泉地の再興や海外からの旅行客を含めた集客を図ろうとしている温泉地も増加している。公共施設としての役割が大きい共同浴場は、その整備や活用を中心に位置づけられ、常に注目される存在といえる。

こうした社会背景のなかで、温泉地の歴史には欠くことのできない、温泉地の核として機能した共同浴場に関して、その歴史的な役割だけでなく、建築的・空間的な歴史的実態を明らかにする必要がある、社会的な需要があると考えた。

（2）学術的動向

我が国にとって温泉は、有史より現代に至るまで身近な存在であることは周知のとおりであろう。そのため医学や文化、経済、歴史など、温泉に関わる研究は多方面でおこなわれてきた。建築史の分野では、伝統的な旅館建築に関する意匠および構造の研究などがある。都市史の分野では、主に共同浴場や旅館街、寺社仏閣の位置関係などから温泉地を構成する要素をもとにした都市類型の研究や、湯株に着目した温泉地におけるヘゲモニーと旅館の立地に関する研究などが既往研究として挙げられる。

しかしながら、共同浴場に関する建築史の研究は道後温泉本館や上諏訪温泉の片倉館など、文化財指定を受けた単体建築についてのみである。建築史だけでなく都市史の分野も含めて、多くの温泉地に存在し、かつ歴史的に温泉地の核としてその役割を担ってきた共同浴場に関する研究が未開拓といえる状況で、学術的にも新規性があると捉えた。

2．研究の目的

（1）研究の意義

上記のように、共同浴場の建築史研究や共同浴場を中心にみた都市史研究は未開拓であった。その背景には、日本全国に温泉地は多数成立しているものの、公共的・恒常的に利用される施設であるがために、建物としての更新が早く、歴史的建造物が少ないことが一因と考えられる。修理または更新周期の早い共同浴場ではあるが、その変遷を捉えることは入浴施設としての建築類型の視点だけでなく、広く建築史の一端を明らかにすることができ、意義のあることと考えた。さらに共同浴場の建築的変遷は、温泉地全体の歴史的変遷や空間的変容を知る上でも欠かせない重要な要素である。したがって、共同浴場の建築史、さらには温泉町の都市史の基礎的研究および基礎資料とすることを目的とした。

（2）広域な視点による新規性

これまでの共同浴場の建築的変遷に関する研究は単体建物についてのものが大半であり、地域的特色や文化的影響などは詳細に研究されていない。そこで、ある一定の文化圏の圏域を調査対象とすることで、単体としての変遷だけでなく、地域的な動向をうかがうことが可能ではないかと考えた。調査対象には、これまで福嶋が研究フィールドとしてきた近世期の加賀藩領を一定の圏域とした。加賀藩領の温泉地のなかでも、近世期より共同浴場を有した温泉地および近代期に開発された共同浴場を有する温泉地を対象とすることで、時代的・経済的・権利的な相違を捉えることが可能と考えた。局所的な共同浴場を対象とするのではなく、より広域な視点で共同浴場建築を俯瞰するために、江戸時代の加賀藩領である石川県と富山県を一定の圏域とした北陸地方を対象として、近世期から近代期にかけての温泉地の共同浴場について、建築構造や意匠、技術、材料の歴史的変遷を明らかにすることを目的とした。加えて、これらの変遷から温泉地全体の空間的変容も視野に置いた。

3．研究の方法

調査地は江戸時代の加賀藩領である石川県と富山県に位置する温泉地のうち、近世期より共同浴場を有する温泉地として、山中温泉、山代温泉、粟津温泉、和倉温泉、湯涌温泉の5カ所と、明治以降に共同浴場が設けられた、もしくは整備された温泉地として片山津温泉と旧立山温泉の2カ所、合計7カ所の温泉地を調査対象とした。特に山中温泉、山代温泉、粟津温泉、片山津温泉は、現在、加賀温泉郷と称され、近代には温泉電気軌道が各所を結ぶように敷設されるなど、一定の文化・経済的な圏域を形成していたと考えた。また7カ所のうち、6カ所の温泉地では、共同浴場を「総湯（惣湯）」と呼称し、同一の文化圏に含まれると考えた。

調査は現地でのフィールドワークおよび図書館等での史料調査が主体とし、2016年4月に科

研費の採択決定後に実施した。2016年度は6月に加賀市立図書館および石川県立図書館へ赴き、山中温泉、山代温泉の共同浴場建築について、史料調査をおこなった。主に町議会議事録やマイクロフィルム化された新聞記事を確認し、共同浴場の新築や改築に関連する情報を収集した。次に11月には富山博物館、富山県立山カルデラ砂防博物館、国土交通省北陸地方整備局立山砂防事務所、立山町郷土資料館に赴き、各施設の研究員や職員の方々に対応いただいて旧立山温泉に関する図面資料、古写真などを閲覧複写した。また富山県立図書館へも赴き、近世文書および行政文書などを閲覧記録した。12月には和倉温泉の共同浴場を調査対象とし、七尾市和倉温泉観光交流センターにて共同浴場の古写真や古記録などを閲覧し、建物変遷に関わる情報を収集した。加えて、石川県立図書館にて、和倉温泉の共同浴場に関する文献調査をおこなった。2016年度は現地調査に加えて、7月および12月に国立国会図書館東京本館、東京都立中央図書館にて、各調査対象温泉地に関する既往研究や絵図・地図、古写真等の資料収集をおこなった。2017年1月には小松市立図書館および粟津温泉観光協会に赴き、粟津温泉の共同浴場に関する史料収集をおこなった。2017年2月には金沢市立玉川図書館、近世資料館、石川県立図書館にて、湯涌温泉、片山津温泉、山中温泉、粟津温泉、和倉温泉の共同浴場に関する史料収集をおこなった。2016年度のうちに調査対象とした各温泉地の共同浴場に関する基礎的資料の収集は完了した。

次年度の2017年度は、前年度に収集した資料の分析および建築図面のCAD化を進めた。加えて、昭和5年発行の『日本温泉案内』（大日本雄弁会講談社編、東部編・西部編）をもとに、わが国における戦前期の温泉地について、共同浴場の有無、建物名称に加え、旅館数や温泉の効能に関する諸情報を対象としたデータベースの作成に取りかかった。

最終年度である2018年度は主にデータベースの作成を進めた。調査成果の公表を目的として、2018年には計3回の口頭発表をおこない、加えて論文集へ論稿を寄稿した。

4. 研究成果

調査対象の7カ所の温泉地に建てられた近世から昭和戦後までの共同浴場について、図面資料を整理することで、その規模や構造形式、建築意匠の変遷があきらかとなった。その概要をここに記す。

(1) 共同浴場の規模や構造形式の変遷

山代温泉では文献史料や絵画資料から、共同浴場の改築に関する明和4年（1767）の文献史料の記述に始まり、江戸時代に4回の改築または改修がおこなわれ、明治以降では現代まで8回にわたって新築もしくは改築が行われていたことがわかった。それぞれ建物の規模や屋根形式にも変遷がみられ、特に昭和初期からは浴室部分の構造がコンクリート造に変化し、浴場施設として意匠上でも近代的発展がうかがえた。このコンクリート造の浴室棟をもつ共同浴場は京都帝国大学教授の武田五一の設計であり、本研究では議会議事録から施工業者や建築費用、当時の雑誌記事から図面資料を発見し、現在これらの新出資料をもとに、論稿をまとめている。

山中温泉では、近世の明和期（1764-1772）や文政期（1818-1831）に共同浴場改築の記録が残る。また嘉永3年（1850）の絵図に共同浴場の平面図が描かれ、幕末期の建築規模や構造などが史料から確認できた。明治以降では、地元民が利用する共同浴場（菊の湯）のほかに、複数の共同浴場が建てられており、古写真からその建築様式があきらかにできた。

旧立山温泉では、地元民が利用するよりも、立山の登山客が利用していた。近代に立山温泉株式会社が設立され、登山客を対象に温泉経営がなされ、当時の平面図では共同浴場というよりも宿泊施設が併設された旅館といえる建物であったことがわかった。

和倉温泉では、19世紀初頭までに湯元の湯島に共同浴場の建物が建てられていたことが絵画資料に描かれる。江戸時代の様相は史料の制約があり詳らかでないが、明治以降は古写真も多く残り、共同浴場の変遷が詳細に判明した。明治32年（1899）には木造で洋風意匠の外観を呈する共同浴場が新築され、昭和29年（1954）に新築された共同浴場は設計施工者や不要となった旧共同浴場建物の移築先なども判明した。戦後にはコンクリート造の共同浴場に変化し、昭和29年新築時と同一の設計者によって設計されていたこともあきらかとなった。

粟津温泉では、明治期まで木造平屋であった共同浴場は、大正期には2階建てで浴室部分をコンクリート造とするものに改築されていた。外壁はタイル張り。縦長窓を設けるなど、近代的な構造意匠を採用していた。戦後の昭和45年には共同浴場全体がコンクリート造に建て替えられたとみられる。昭和59年の共同浴場改装に関する記事に改装前後の平面図が記され、改装の理由として、浴室内タイルの破損、給湯設備の故障などコンクリート造の躯体に関わる問題ではなく、むしろ内装や設備機器の老朽化が修理の要因であったことがわかった。

共同浴場の規模については、やはり近代以降、2階建てに建て替えるものや平面規模も拡大する傾向にはある。しかしながら戦前期までは江戸時代からの立地を継承する場合が多く、敷地制限もあって大規模な建物規模の拡大は少ない。むしろ戦後に温泉街一体を整備するなかで、より広大な立地に移転する場合が多くみられた。これらは配湯設備が整ったことも影響しているだろう。構造形式では、江戸時代から明治時代は木造であったが、大正～昭和初期を境に、全体もしくは浴室部分をコンクリート造に造り替える事例が増加していた。他のブルディングタイプや入浴施設として同類型の銭湯建築と同様に、共同浴場建築もコンクリート造に構造形式が変化し、コンクリート造に変化することで可能となるタイル張りや曲線の意匠などが増加することが確認できた。

(2) 修理周期

調査対象の共同浴場について、文献資料をもとに建物の修理および更新周期などをあきらかにした。近世期の修理周期については史料の制限もあり、想定される修理周期よりも短い可能性が高いことに留意されたい。

山代温泉では、近世期より概ね10年から20年周期で改築がおこなわれ、明治以降ではおよそ10年周期で建て替えもしくは増改築がおこなわれていた。和倉温泉では、戦前までは10年周期で改築もしくは修繕がなされ、戦後は10年周期で建て替えられていたことがわかった。

先述の粟津温泉のように、戦前までの共同浴場では、建物の腐朽が修理、改築、新築の主な要因であったと考えられる。それは共同浴場が木造であり、恒常的に温泉に接していたからに他ならない。しかしながら、次第にコンクリート造に変化し、建物の躯体は腐朽に耐えうるようになったものの、内装に導入されたタイルの割れや配管の劣化など、内装や設備機器等を要因として修理をおこなうことが増加したことが想定される。それら設備機器の更新に加えて、近代以降の観光地としての温泉地の発展にともない、経済成長による財政面の影響もあって、一般のコンクリート造と比較しても早い10年周期で建物が更新されていたことが想定される。コンクリート造の共同浴場の更新周期は、今後も事例を増やして、周期およびその要因を追求する必要がある。

(3) 建築様式の変遷

古写真や絵画資料から、各時代における建築様式の変遷をあきらかにした。江戸時代の共同浴場は木造で、屋根は切妻造もしくは寄棟造を基本とし、特に意匠的であったとは言い難い。しかしながら、明治以降、意匠的な変化が各共同浴場で確認できた。和倉温泉の共同浴場では明治以降に下見板張りの洋風意匠の外観をもち、粟津温泉では外壁をタイル張り、縦長窓を採用するなど近代建築の要素もみられた。一方で、武田五一による山中温泉の共同浴場はコンクリート造でありながら、玄関に唐破風屋根を設けた和風意匠を造り出している。反対に、ほぼ同時期に建てられた山代温泉の共同浴場では、浴室棟をコンクリート造で造りながら、脱衣所棟は伝統的な木造建築で建てられていた。近代における建築様式の変化を共同浴場も共有していることが理解でき、加えて、意匠的にも多様になったことがわかる。戦後はおよそ10～20年周期で建物が更新され、温泉地の中核を担った共同浴場はその時代ごとの意匠を取り入れ、注目を集める公共施設であったといえよう。

これらの成果から、特に近代以降の建築材料の変化にともなう共同浴場の構造や意匠の変遷、さらには温泉町における社会的・経済的側面の変容を読み取ることができ、共同浴場の建築史、温泉町の空間史を読み解くうえでの基礎的整理ができ、今後の研究の礎になると確信する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

- (1) 福嶋啓人、銭湯と共同浴場の建築史、京都造形芸術大学公開講座芸術学舎、2018年10月6日・7日、京都造形芸術大学大阪サテライトキャンパス(大阪府大阪市)
- (2) 福嶋啓人、浴室建物について 法華寺を中心に、佐保川地域ふれあい会館歴史講座、2018年9月8日、佐保川地域ふれあい会館(奈良県奈良市)
- (3) 福嶋啓人、入浴の歴史と建築、第122回公開講演会、2018年6月16日、平城宮跡資料館講堂(奈良県奈良市)

〔図書〕(計1件)

- (1) 福嶋啓人 他、吉川弘文館、危機の都市史 災害・人口減少と都市・建築、2019年、64-83頁(温泉町と源泉枯渇 - 近代加賀山代温泉を事例として -)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。